

## 主題 愛されて育つこども

香川:認定こども園 勅使百華幼稚園  
横山 綾香(保育教諭)  
濱崎 里美(保育教諭)  
泉谷 由紀子(主幹保育教諭)  
山本 幾代(高松短期大学准教授)

### 1. はじめに

本園は、高松市の南部に位置し、比較的 naturally 恵まれた環境の中で「仏教精神に基づく豊かな情操を培う」という目標のもと「ありがとう・おかげさまで」の気持ちを育みたいと願っている。

平成30年度より認定こども園となり、現在265名の園児が在籍し、広い園庭で友だちと走ったり、散歩等で花や虫に出会ったり伸び伸びと過ごしている。特別教室の音楽・体育・絵画・硬筆・英語・茶道・リトミック・スイミング・フットサル・スケートなど様々な活動にも力を入れている。

保育者は、子どもたちが主体的に遊びを見つけられる支援を心掛け、子どもたちが認められる喜びや安心感を実感できる保育を行っている。そして、特別教室の経験を単なる受け身の活動に留めるのではなく子どもが意欲的に取り組み、自己充実感や達成感を味わい自己を発揮できる力が育つよう働きかけている。さらに、子どもたちの経験を豊かにし集団の中の個に寄り添いながら保育に努めている。

### 2. 提案にあたって(研究の目的)

少子化や核家族化、地域の関わりの減少や家庭環境等により、個別に配慮を必要とする子どもがいる。特に、初めて集団生活をする3歳児は、経験も成長も個人差も大きい。

新入園児のA児は、初めてのことや知らないことに出会うと不安になり、言葉ではなく「泣く」という方法で友だちや保育者に訴えていた。言葉で伝えられないA児にどのように関わっていけば良いのか、A児のことを友だちにどう伝えていくべきか、A児の成長のためにどのような手助けができるかを試行錯誤した。一人ひとりの子どもの心に寄り添い、育ちを常に見守り援助できているか、見逃していることはないかと振り返り、保育者同士で情報を共有し、家庭との連携の必要性についても考える。そして、A児と周りの友だちの成長が、クラス集団の育ちに繋がるよう、幼児教育が果たすべき役割について検討し、毎日の保育を見直すこととした。

### 3. 倫理的配慮

対象者には調査の目的と方法を説明した。また、調査の協力は自由であること、途中でも拒否できること、結果は幼児研究のみ発表するが個人は特定しないことを説明し同意を得た。

## 4. 実践の骨子

### ◎ 研究の進め方

#### 1. 保護者との連携の在り方

毎日の連絡帳のやりとりで、園と家庭の様子を相互に伝え合い、子ども理解を深める。

#### 2. 担任だけで抱え込まない体制を考える

保育者集団の共通理解と協力体制の見直し。情報収集に努め、客観的に多面的な意見をもらう。  
一人の子どもを保育者全員で見ると、考える、実践する、を合言葉に課題を明確にする。

#### 3. 子ども同士の関わりと育ちの確認

自分の思いを伝え、相手の気持ちにも気づき、ともに育ち合う仲間づくりをめざす。

#### 4. 就学保障に繋げる

円滑な就学に繋げるために、小学校との連携と卒園後の保護者支援について考える。

## 5. 3歳児のまとめと課題

初めての集団生活に戸惑い、言葉を発せず泣いて訴えるA児。どのように理解し関わっていったら良いのか悩む毎日の中、保育者間で話し合い、A児をありのまま受け入れ理解することから始めた。家庭訪問では、園の様子からは想像できない家庭でのA児の姿があり園でも自分らしく生活してほしいという思いが強くなる。連絡帳でのやりとりにより、家庭でのA児の様子を知ること、保護者とA児の両方と信頼関係を築くきっかけとなった。日々の保育の中で、保育者の葛藤や上手くいかないこともあったが、その時のA児の思いを受け入れ、みんなと同じような言葉かけやスキンシップ、褒めることを続けてきた。次第に、園生活に慣れてきたA児は、活動には参加しないがクラス活動の様子をよく観察するようになってきた。家庭で園の活動を再現している様子が分かり、A児の成長を感じると共に保護者連携の大切さを学んだ。

また、保育者同士で連携を図ることで、A児の理解を深めた。周りの保育者が気づいたA児の情報を得ることにより、私の前では見せないA児の姿を知り、理解を深め寄り添うことに繋がっていった。保育者同士の協力によって何気ない様子を伝えあい、共にA児を見守ってくれていることが、担任として大きな支えとなった。今後、A児自身で就学前までに乗り越えなくてはならない課題等について保育者の関わり方、友だち関係を含む集団の成長を園全体で話し合い、共通理解して次の学年に繋げていった。

運動会やお遊戯会、合奏等の行事で堂々と表現した様子を見て「見る」ということがA児にとって「活動」であり「見ることで活動に参加している」ことに気づいた。泣くことも表現の一つであり、ありのままを保育者が受け入れることで、周りの子どももA児への関わりに変化が出てきた。A児とB児の関係性からは、B児が橋渡し役となり、友だちの輪が広がり、クラスの友だちに受け入れられ、クラス集団としての育ちへと繋がっていった。

本研究によって、A児だけでなく3歳児を取り巻く様々な家庭環境、経験値の違いによる成長の個人差を認め、より丁寧に関わっていく必要があることがよく分かった。これからも一人ひとりの心と向き合い、その子にどのように育って欲しいかを明確にしていき、子どもたちがたくさんの人に愛されていると感じられるような園作りに努めたい。保護者連携についても理解を深め、就学保障に繋がられるような援助ができるよう努力していきたい。

## 6. 4・5 歳児のまとめと課題

4・5 歳では、保護者連携の在り方を見直した。保育者が保護者に寄り添い信頼関係を深め、子どもの育ってきた背景や保護者の本当の思いを知ること、子どもをより理解することや育てることに繋がった。また、個の育ちが集団の育ちに繋がるということを再認識した。

4 歳児では、自己表現することの楽しさや自分でやり遂げることの満足感を味わい、友だちとの関わりの中で一緒にいることの喜びや相手の思いにも気づき始めた。自分の思うようにならない場面では、保育者が思いを受け止め、仲介しながら気持ちに折り合いをつけて遊びを進めていき、様々な感情を経験していった。そのことで、自尊感情を高め、自己尊重から他者尊重へ繋がる育ちを見ることができた。

友だちを受け入れ認めることで、友だちを観察したり試したり、個に応じた関わりをする子どもの姿となった。ある日こんな子どもたちの姿があった。A 児との関わりの中で、なかなか言葉にならない A 児の思いを受け止めた子どもたちは「にゃんにゃん言葉」や「足ジャンケン」で目を合わすことに抵抗があった A 児のために D 児たちが発見した遊びであった。仲間として成長していく姿から私自身が学ぶ機会となった。

5 歳児になり、園で最年長となった嬉しさの中で、クラスの友だちに言葉で自分の思いが伝わる嬉しさや満足感を味わい始め、自分で考えてできることが増え自信に繋がってきている。表現する方法は、声を出して伝えるだけではないことを子どもたちは経験の中から気づき、相手の気持ちに寄り添いながら関わる経験を重ねている。また、年齢が低い子どもとの関わりの中で、自分が受け入れられ認められたり頼られたりする嬉しさや戸惑いなどの経験を重ねた。見通しをもって行動し、友だちと協力しながら意見をだして話し合い自分たちで生活を進めていくことが楽しいと感じるようになってきている。

様々な場面で、自ら育とうとする力を見逃さずに支援していくことの大切さを実感した。幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を育むためには、大人の安定した愛着と保育環境や保育者への安心感や信頼関係の中で育つと考える。

保育者は、子どものありのままを受け入れ、その背景にある家庭と協力することで個の育ちが集団の育ちに繋がっていくということを改めて実感した。

「愛してほしい（愛情）」「認めてほしい」「見てほしい」この 3 つのことが獲得できれば、子どもは安心してどんなことにも勇気をもってチャレンジできるのではないかと考える。

そして、伝えたいことのある経験をする、聞いてくれる仲間や保育者がいることが重要であることも理解できた。

『愛されること』が、子どもの育つ上での基本となり、環境・人など『愛されている』と感じる中で生活することが子どもの育ちに繋がっていくと考える。

今後は、小学校進学に向けて小学校と子どもの育ちを共有し、接続を円滑にするために連携を密にすることはもちろん、保護者支援を継続できるような園での取り組みが課題となった。

**\* このグループに参加される方は、当日資料を配布します。**